

『臨洞庭』 孟浩然

洞庭湖の大観と仕官の志

臨洞庭 孟浩然 洞庭に臨む 孟浩然

八月湖水平 八月湖水平らかなり

涵虚混太清 虚を涵して太清に混ず

气蒸云梦泽 气は蒸す云梦沢

波撼岳阳城 波は撼かす岳阳城

欲济无舟楫 济らんと欲するに舟楫無し

端居耻圣明 端居して聖明に恥ず

坐观垂钓者 坐して観る垂钓の者

徒有羡鱼情 徒に魚を羨むの情有り

【語句の意味】

洞庭 洞庭湖湖南省の北部に位置し、湘水・資水・沅水・澧水の四大河川が南と西から流れこみ 北は長江と連なる巨大な湖の名 ただし 湖水の大きさは

時代によって小から大へ そして再び小へと大きく変遷した

涵 たつぷりと水の中につける たつぷりとうるおす

虚 空

混 いろいろな物が一つになって区別がなくなる

太清 清なる天

气蒸 たちのぼる気体・水気

雲夢沢 中国古代の大きな沼沢の名 今の湖北省南部から湖南省北部にかけての長江中流域にあつて 九百里四方の広さがあつたといわれる

岳阳城 岳州城のこと 今の岳陽市

舟楫 舟とかい 転じて 天子の政治をたすける臣下のたとえ

端居 何もしないで平生どおり座すのみ

聖明 すぐれた天子

坐観 すわつたまま見物する

羨魚情 魚をうらやましがる気持ち「臨河而羨魚」(淮南子・説林)

説林)

【意解】

秋たけなわの(陰暦)8月、湖は満満と水をたたえて広がり、大空をひたしつ、はるか水平線のあたり、天空と連なっている。

湖面から立ちのぼる水気は、ここ「雲夢の沢」一帯に深々とたちこめ、うち寄せる大波は、湖畔の岳陽の城をゆり動かす。自分は今の湖水を渡ろうとするが、手だての舟もなく（仕官をたすけてくれる者もない）ただ何もせず日々を暮らし、聖代の天子に対し恥じ入るばかりである。

湖岸にすわって釣りをしている人を観ては、自分も魚がうらやましい（仕官を求めたい）が徒らに望みを抱くだけだ。

孟浩然（689～740）

盛唐の詩人。字も浩然。一説に「名は浩、字は浩然」とする。襄陽（湖北宜襄樊市）の人。科挙に及第せず、官職を得ぬまま、各地を放浪したり、郷里に近い鹿門山に隠棲したりして日々を過ごした。その詩才は広く認められ、張九齡や王維・李白らと親交があった。とくに12歳年少の李白は、孟浩然の詩風や生活態度に強い共感を覚えていたと見られる。その詩は自然描写に秀で、王維とともに「王孟」と称せられ、また中唐の韋応物・柳宗元を加えて「王孟韋柳」と称せられる。「孟浩然集」がある。

孟浩然の詩は、不遇感から来る愁嘆を主とするものと、隠者の超俗的な心境を主とするものの2系列がある。前者の例では、次の五絶などは、よく工夫された風景描写が感情とマッチして、読む者の琴線に触れる。

宿建德江

建德江に宿す

移舟泊煙渚 舟を移して 煙渚に泊し

日暮客愁新 日暮 客愁新たなり

野曠天低樹 野は曠くして 天 樹に低れ

江清月近人 江は清くして 月 人に近し

——舟を寄せてもやの立ちこめる岸べにつなげば、この夕べ、旅の悲しみが新たにこみあげる。広野ははるかかなたへつづき、大空が地平線近くで樹林にたれ下がっているようであり、大江の流れは清く澄んで、水面の日かげは私のすぐそばにあるかのようだ。——

一方、後者の例では、有名な五絶「春曉」である。

春眠不覺曉

處處聞啼鳥

夜來風雨聲

花落知多少

出仕が、未明に星を載いてのものであったのに対して、その俗世の榮達に超然たる高士の世界に住む作者の立場を詠じている。

【鑑賞】

原題は「臨洞庭上張丞相」（洞庭湖を臨んで張丞相に上る）の前半は

八月湖水平
涵虚混太清
氣蒸雲夢沢
波撼岳陽城

は骨太の筆致で大自然の威容を描いている。

北宋末の范致明『岳陽風土記』にいう「常に西南風多く、夏秋水漲るとき、濤声（濤の音）喧きこと万鼓の如く、昼夜息まず、「岳陽」城の岸を漱齧す（洗い浸食する）」と上下・左右の相異なる動きを捉えた「氣蒸雲夢澤 波撼岳陽城」の二句は、杜甫の「登岳陽樓」「吳楚東南坼 乾坤日夜浮」とともに、洞庭湖を詠んだ無数の対句のなかでも、とりわけみごとな表現といえよう。後半は官職を求めてそのつてを得たい心情の表現とするもののほかに、自分に官職を与えない天子に対する非難の心を含めたものとしたり、釣り糸を垂れて、官職を求めている人に対する諷刺の心をこめたものとしたりする解釈もある。

【参考】

望洞庭 劉禹錫

湖光秋月兩相和
潭面無風鏡未磨
遙望洞庭山翠小
白銀盤裏一青螺

湖光 秋月 兩に相ひ和し
潭面 風無く 鏡未だ磨かず
遙かに望む 洞庭山翠の小なるを
白銀盤裏の 一青螺

——湖の輝きと秋の月とが美しくとけあい、広々とした湖面は風もなくおぼろにけむって、まるで磨く前の銅鏡のよう。はるかに洞庭湖を眺めやれば、湖中の君山は濃い翠色に染まって小さく、あたかも白銀の盤のなかに置かれた青い螺のよう。——

《洞庭湖の変遷》

先秦・漢普期（3世紀以前）の洞庭湖付近は、水路網が縦横に交錯する平原「洞庭之野」であり洞庭湖も君山の西南、沅水と資水の交わる場所にある。きわめて小さな湖へ洞庭にすぎず、湘水などは直接、長江にそそいでいた。従って戦国の楚の詩人屈原が、湖辺の秋色を描いた「湘夫人」（九歌の一、『楚辞』所収）中の名句、「嫋嫋たる（そよそよと吹き続ける）秋風、洞庭波だつて木葉下る」は当地あるいは南方の人しか知らない小湖の描写であり、これを唐末期の大湖のように解釈するのは、いわば美しい「錯覚」にすぎない。

南朝（4世紀）以降、清代後期（19世紀半ば）に到る期間は湖が緩慢に沈み続け、湘・資・沅・澧の四水もみな湖へとそそぎこんで急速に拡大化した時期である。南朝期、湖は北の君山付近から南の青草湖にまで広がって周囲500余里となる。続く唐宋期になると、西へとさらに拡大し

て赤沙湖を呑みこんだ。

かくして「洞庭九州（天下）の間、厥その大きさ誰にか与ために譲ゆずらん」（韓愈「岳陽樓にて寶司直と別る」などと歌われ、「八百里の洞庭」と呼ばれる中国最大の淡水湖となる（今の華容県・常德市・沅江市・岳陽市におよぶ範囲である）。

北魏の酈道元『水経注』卷二十八、湖水の茶には、「湖水（洞庭湖）は広円（全周）五百余里、日月其の内に出没するが若し」と記され、五代の詩僧可明は、「洞庭を賦す」詩のなかで「周極（全周）八百里、眸ひとみを凝こらして望みめば（眼）則つち勞つかる」を歌った。八百里とは、洞庭湖と南に連なる青草湖の合計「五百里」に、西の赤沙湖を加えた広大な水域の総称らしい。夏と秋の増水期（渇水期との水位の差は十数メートルに達した）には、三湖は一つの巨大な湖に変貌した。そして明代から清の中期にかけて、湖は全盛期（八〇九百里）を迎えた（ただ水深は浅くなる）。

ところが清代の後期（19世紀の半ば）以降になると河川の運ぶ大量の泥沙の推移と南宋以来の干拓事業の結果、急速に縮小化しつづけ、1950年代にはついに長江下流の鄱陽湖はようにぬかれて、中国第2の淡水湖となり、沼沢化が進行して、将来、消滅の危険性をもつ。